

**-大学院歯学独立研究科-**  
**第 112 回 中 間 発 表 会 プ ロ グ ラ ム**

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。  
どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所：実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室  
日 時：2021 年 2 月 24 日 (水) 17 時 25 分 開会

—2021 年 2 月 24 日 (水) —

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶 平岡研究科長	
1	<b>[中 間]</b> 17:30～18:00 司会：富田 教授	「舌口唇機能訓練が高齢者の認知機能と舌口唇圧及び機能に与える影響」 2年 健康増進口腔科学講座 口腔健康政策学専攻 増田 由起	主査：吉成教授 副査：北川教授 ：小笠原教授

**発表内容の要旨(課程博士)**  
**Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)**

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1909	入学年 Entrance Year	2019年 Year	2年 2 years
(ふりがな) 氏名 Name in Full	ますだ ゆき			
専攻分野 Major Field	健康増進口腔科学 口腔健康政策学			
主旨導教員 Chief Academic Advisor	富田 美穂子			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation	舌口唇機能訓練が高齢者の認知機能と舌口唇圧及び機能に与える影響			
発表要旨 / Abstract				
<p><b>【目的】</b> 2025年には高齢者の5人に1人が認知症になり、約700万人に達すると言われている。しかし、認知症は進行性の病変であり薬で治癒するものではないため、運動療法や知的ゲーム、バランスの良い食事を取るなどの予防策や改善策が報告されている。近年、口腔機能と全身機能の関係が明らかにされてきたため、認知機能の向上のための歯科領域からの専門性アプローチが期待される。そこで、本研究では舌筋力、口唇圧や舌口唇機能と脳機能の関連を明らかにするとともに、舌口唇機能訓練が脳機能に与える影響を検討する事を目的とする。</p>				
<p><b>【方法】</b> 65歳以上の高齢者41名を対象に認知機能検査(MMSE)、口腔内診査(現在歯数)、舌筋力測定、口唇圧力測定、舌口唇機能測定(diadochokinesis: ODK/sec)、口腔内の湿潤度を測定した。そこでまず、MMSEの点数と各項目との相関関係(Pearsonの順位相関係数)を求めた。次に、対象者を無作為に、訓練有群(Tグループ)と訓練無群(Nグループ)に分け、Tグループには舌口唇機能訓練を1日3回実施させた。2群の初回、3, 6, 9ヶ月後のMMSE、舌筋力、口唇圧力、ODK、口腔内の湿潤度を調べ、それらの結果に対して Friedman検定をした後、Dunnett T3-testを用いて各回を比較検討した。</p>				
<p><b>【結果】</b> MMSEの点数は、年齢、現在歯数、舌筋力、口唇圧、ODKとの間に相関が認められた(<math>P&lt;0.05</math>)。ODKは、年齢、歯数、舌筋力、口唇圧、湿潤度との間に相関が認められた(<math>P&lt;0.05</math>)。Tグループにおいて、MMSEはFriedman検定では有意差が認められたものの、各回での比較では有意差が認められなかった。また、訓練6ヶ月以降の舌筋力と口唇圧は、訓練前と訓練開始後3ヶ月と比較して有意に上昇した(<math>P&lt;0.05</math>)。ODKと湿潤度は、訓練による変化は認められなかった。Nグループにおいて、6ヶ月以降の口唇圧は初回と比較して有意に上昇した(<math>P&lt;0.05</math>)。MMSE、舌筋力、ODK、湿潤度に変化は認められなかった。</p>				
<p><b>【考察】</b> 加齢とともに認知機能が低下し、舌筋力、口唇圧も衰え、ODKも減少すると考えられた。しかし、高齢者の認知機能は一定ではなく、環境や身体の状態に左右された。また、口腔内の湿潤度、舌筋力、口唇圧が高いと舌口唇機能が良いと考えられた。さらに、舌口唇機能訓練を6ヶ月以上継続する事により、舌筋や口輪筋は鍛えられることが示唆された。しかし、認知機能やODKを上昇させるには、訓練を長期間継続するか、別の介入を考慮する必要がある。</p>				